

## 第2章

### 目的

ここでは、大学在学中に獲得した資質・能力の水準が学部ごとで開きがないか、その検証を目的とした。

### 対象および手法

比較には、質問5 “あなたは、大学入学から大学卒業までに、以下の知識・能力をどのくらい身につけることができましたか”の17項目と回答結果を用いた。回答結果は、リッカート尺度により得られた値を、学部を集計単位として平均値および信頼区間を算出した。学修成果を測定する（学位プログラムの評価）には、学科単位での評価が理想であるが、データ数が小さくなり解析が困難であることが見込まれたため、学部を基礎単位とした。

なお本調査は、無作為抽出したものではないため、平均や区間推定の値にも、バイアスを含んでいるものと考えるが、これらは解釈の際に留意するのにとどめ、分布の可読性を優先した。

### 結果

図1-1は、質問5における学部全体の回答結果で、平均値（エラーバーは95%信頼区間）を表している。C, D, Eの3つは低い水準にあり、特に**D. 外国語の運用能力**は2.56と最も低い結果が認められる。

図1-2は、質問5における学部別の回答結果で、平均値（エラーバーは95%信頼区間）を表している。**D. 外国語の運用能力**においては、文学部で、2.94 [2.73-3.15] で高い値を示しており、他の学部と大きな開きが認められる。

### 追加の解析

以上から、**D. 外国語の運用能力**においては全学部で低い水準にあること認められたが、何が結果と関連性を持つのか追加の解析を行った。

解析手法には、相関分析を用いた。対象のデータには、質問5の“**D. 外国語の運用能力**における回答”と“質問4のあなたは、大学在学中、どのような学び方をしましたか”における回答”を用いた。

追加の解析からいづれ学部においても、**E. わからないことがあるとき、授業後などに先生に質問した**との間で一定の関連性があることが認められた（表1）。学生の性格、学部の特性、バイアスなどを考慮すると、無条件に適用することはできないが、学生にとって質問のしやすい授業は、改善の一助に繋がると考えられる。

















